

EUROCALL 2015, 2016参加報告

外国語学部 太田達也

EUROCALL (European Association for Computer Assisted Language Learning) は、コンピュータ、インターネット、モバイル機器などの情報通信技術 (ICT) を利用した言語教育の実践研究をテーマとするヨーロッパの学会であり、毎年夏にヨーロッパの一都市で国際学会を開催している。筆者はこれまで2008年、2010年、2014年の大会に参加しているが、2015年は南山大学ヨーロッパ研究センターの研究交流助成を、また2016年はJSPS科研費の助成を受けてこの大会に参加した。

第22回EUROCALL大会は、2015年8月26日から29日まで、イタリア北西部にあるパドヴァ大学の言語センター (University of Padova, Language Centre) がホスト校となり、同地にて開催された。1222年創立のパドヴァ大学は、ガリレオ・ガリレイ、ダンテ、ペトラルカなども教壇に立ったというヨーロッパ最古の大学のひとつであり、旧市街にある建物にはさすがに長い歴史と伝統を感じさせる趣がある。この年のテーマはCritical CALLで、大会のProceedingsによると、これは昨今幅広い分野で研究が行われている *Critical Applied Linguistics* (CAL) から着想を得たものであるという。CAL (批判的応用言語学) についてはPennycook (2001) の書に詳しいが、criticalという語はここでは、これまで当然のごとく扱ってきた概念や前提をつねに疑い、自省的態度をもって対象に取り組むことを意味する。これは、単に対象との間に客観的な距離を置くという意味でのcriticalに留まらず、権力や不平等の問題を扱うといった政治性をも射程に入れた立場をとる。従って、教室内での言語使用や会話などのミクロ面が、社会・文化・政治といった様々な社会問題であるマクロ面とどのように接続するのか、といった点にも多大な関心が向けられる。こうした意味を持つCALのcriticalという概念をCALL (Computer-Assisted Language Learning) の前に冠するという今回のテーマは、なかなか秀逸なものだと思う。CALLという語が一般的に用いられるようになってすでに久しく、MALL (Mobile-Assisted Language Learning) という概念も浸透しつつある現在、これまで「前提」とされてきた学習環境や学習者のビリーフ、学習行動、学習態度等をいま一度criticalに検証し、これからの言語学習環境構築についてオープンに議論することには大きな意義があると言える。大会には37カ国から300人を超える研究者たちが参加し、68のセッションにおいて、200以上の発表が英語またはイタリア語で行われた。筆者自身は、共同研

究者である藁谷郁美氏（慶應義塾大学）、Marco Raindl氏（獨協大学）とともに、“Examining and supporting online writing — a qualitative pre-study for an analytic learning environment”と題し、口頭発表を行った。この発表は、学習者が日常生活の中で学習言語を使ってSNSにメッセージ等を書く際どのようにして問題を解決し作文作業を行っているのかを調査した実証研究の結果を報告し、その知見に基づいてインフォーマル学習における新たな作文支援環境構築の提案を行うものである。発表後、フロアからさまざまなフィードバックやコメントが得られ、とりわけ学習者行動に関する個人情報データの収集方法に関して活発な議論が行われた。

翌、第23回EUROCALL大会は2016年8月24日から27日にかけて、地中海に浮かぶキプロス共和国の都市リマソールで開催された。このときのホスト校はキプロス工科大学（Cyprus University of Technology）で、St. Raphael Resort内の会議室が主な会場として使用された。このときのテーマはCALL Communities and Cultureというものである。言語学習におけるコンピュータ利用を単なるパターン・ドリル練習の機械としてでなく、時間や場所といった制約から解放されたコミュニケーションを実現し、人と人をつなぐコミュニティの形成を可能にするものとして捉え、言語学習者を取り巻く環境および彼らに提供できる学習環境が今後さらにどのように発展していくかを議論する、という「未来指向」のテーマ設定である。37カ国から260余名の参加者があり、160以上の発表が行われた。筆者はここでも共同研究者とともに口頭発表を行ったが、主な目的である「明示的指導とフィードバック」をめぐる研究情報収集の成果としては、Karin Harbusch氏の発表が有益であった。同氏とAnette Hausdörfer氏による共同発表“Feedback visualization in a grammar-based e-learning system for German: a preliminary user evaluation with the COMPASS system”は、学習者の言語レベルに応じて文法上の誤りに対するフィードバックが自動的に提示されるe-learningシステムCOMPASSの運用実験結果について報告するものである。このように学習者個人に適したフィードバックがすばやく自動的に提示されるようなプログラムの開発や、人工知能の技術を応用した知的でインタラクティブな外国語学習システムの構築など、いわゆるICALL（Intelligent Computer-Assisted Language Learning）と呼ばれる分野の研究は今後ますます重要な領域となるに違いない。しかしその一方で、ICTは（自動化とは正反対の）「人と人のつながり」を支援する環境の構築や「学習者コミュニティ」の形成にも大きく寄与し、ひいては学習者の自律性の促進につながる大きなポテンシャルを持つ。これからの外国語教育においてICTが担うであろうその重要な役割と多面的な可能性について、あらためて強く認識させられた大会であった。

参考文献

- Helm, Francesca; Bradley, Linda; Guarda, Marta & Thouësny, Sylvie (eds.) (2015):
Critical CALL. Proceedings of the 2015 EUROCALL Conference, Padova, Italy.
Research-publishing.net.
- Papadima-Sophocleous, Salomi; Bradley, Linda & Thouësny, Sylvie (eds.) (2016):
CALL Communities and Culture da Short Papers from EUROCALL 2016. Research-
publishing.net.
- Pennycook, Alastair (2001): *Critical Applied Linguistics. A Critical Introduction.*
Routledge.

付記

EUROCALL 2015参加にあたっては、2016年度南山大学ヨーロッパ研究センター
研究交流助成を受けた。また、EUROCALL 2016参加にあたっては、JSPS科研費（課
題番号：16K02860）の助成を受けた。